3月2日(日)

令和七年度　神道・宗教特別選考（Ⅱ期）入学試験問題

神道文化学部

小論文

―注意事項―

1　問題は5ページ、解答用紙は1枚である。
2　解答はすべて別紙解答用紙に縦書きで記入すること。
3　試験時間は90分である。

L24A

問一（神道特別選考受験者のみ解答すること）

次の文章を読み、著者の説く今後の日本人の育成について重要だと思われる事項を二〇〇字程度に要約した上で、日本人の生き方や考え方について、著者の考えにも触れながら、自らの考えを八〇〇字程度で述べ、全体で一〇〇〇字程度となるように記しなさい。

第二次世界大戦前の日本人は立派であったとか、日本の兵隊は優秀であったという評価が外国人によって少なからず言われるが、自己犠牲という人間にとって最もつらい事が理想的生き方と教えられた戦前の教育と、それが無縁であったとは考えられない。

第二次世界大戦後、昭和三〇年代の急速な高度経済成長と共に、農業人口は激減し四パーセントまで落ち込んだ。この結果、既述したように、稲を中心とする五穀の豊作を祈願し感謝する春秋の祭りが形骸化し、基本的な祭りに対して多くの日本人の関心が喪失しつつあるのが現状といえる。とすれば、三〇〇〇年もの間に培ってきた水稲耕作による日本文化――日本人の生き方の様式や考え方の傾向が継承されにくくなる。あるいは祭りを通して育成された集団に対する奉仕の精神が、育ちにくくなるのも当然であろう。

一方、昭和二〇年（一九四五）の敗戦以後、それまで国民道徳の基本であった『教育勅語』は、占領軍の命令によって廃絶させられた。また戦前、国民の「奉公」の対象であった天皇は、その権力・権威を奪われ、国民にとってわかり難い「国家の象徴」となった。その上、日本人の生き方の上で規範性をもつ倫理・道徳は、封建的とか軍国主義・超国家主義のイデオロギーとして一蹴（いっしゅう）された。代わって規範性の薄い「民主主義」「自由主義」「人権尊重」などが強調されたことは、周知の通りであろう。

そして戦争直後、政府は経済復興や富国を国家目標として、国民と共に邁進（まいしん）したことは既述した。その結果、物や金さえあれば幸福につながるという崇物・拝金主義、あるいは利己的風潮を助長。人間は文化力が弱まって宗教的信条や倫理道徳を教えなければ、人間の本能にもとづいて我欲に走り、際限のない欲望を生むが、同時に欲望が充足されない不安が増大する傾向にあると思われる。日本は富国に到達したが、精神的に不安定な社会を現出したと推測しても大きな過ちはなかろう。たとえば、家庭崩壊・家庭内暴力・学級崩壊・校内暴力・少年少女による殺人・援助交際など、これまでは考えられない事象が少なからず起こっている。これらの諸事象の根底に、崇物・拝金・利己主義が横たわっていて、その上人間は集団によって生かされているという意識の欠如があると考えると、ほとんど説明がついてしまうのではなかろうか。とすれば、やや短絡的という印象はあるかも知れないが、今後の日本人の育成にとって、以下のことが重要なことと思えてならない。

第一は、人間は集団の中でしか生きられない。その典型が赤ちゃんである。既述したように、人間は子宮外胎児として生まれてくるので、生後しばらくは親ないし他の人間に絶対的に依存しなければ生きられない。人間はよちよち歩きするまでに、平均一年間も準備期間が必要である。

また、歩くことばかりでなく、食事から排泄の処理、言語の習得など、何から何まで親に世話してもらわないと一日として生きられない。幼児期になって自分で歩いたり排泄のコントロールをしたりできるようになっても、親の保護や養育や愛が無ければ、心身ともに健康に育つことができないのである。その意味で、集団を大事にすべきという考えを、きちんと教えるべきということになる。

集団の代表は家庭であり、村や町であり、国家であり、地球全体である。このような人間集団の存在の重要性を教え、認識させることが必要となる。と同時に集団が集団として存続するためには、集団の構成員である個人一人ひとりが集団への奉仕の精神がなければならない。最悪の場合は、集団のために個人が身を献げる覚悟が必要であることも教えなければならない。日本人の大部分が水稲耕作に従事していた時代は、集団への奉仕の精神が、祭りや水稲耕作を営む中で、自然に植えつけられたと言えよう。しかし現代のように農業人口が激減した時代には、集団への奉仕が人間にとっていかに大切かを言葉で説明し、教えなければならない状況と思われる。

第二は、第一の事項と関連するが、日本国家を良くするために努力すべきということだ。われわれ日本人は日本人の子供として生まれたから、日本人になった。自分が日本人に生まれたいと望んで日本人になったわけではない。そうであれば、日本という国を良くする以外に自分達が良くなる方法はなかろう。それがイヤなら外国へ出かけて行って、その国の国籍を取るべきである。日本人の中には日本が誇れる国になったら、日本を愛すと言う人もいるようだが、そのような考えは誤りだと思う。誇れる国に越したことはないが誇れる国であろうがなかろうが、われわれ日本人が日本を尊重し愛する以外に、他の国の人々が日本を愛してくれるのだろうか。

自分自身の過去を振り返ればわかることだが、自分のやってきたことはすべて誇れるという人もいないだろうし、すべて悪かったという人もあまりいないと思う。問題はこれからどうするかを考えることが、大切ではなかろうか。過去の悪かったことばかり拾い集めて、私は悪うございましたと反省してもあまり意味はない。大事なことは良いことも悪いこともできるだけ客観的に捉えて、今後に生かすことと思われる。そのためには、日本の歴史や文化を実証的に学ぶことであり、それに沿った日本改良策を、考え実現すべきであろう。日本の歴史や文化を抜きにした改善策は、絵に描いた餅にしかなるまい。

（安蘇谷正彦氏の文章に基づく）

問二（宗教特別選考受験者のみ解答すること）

次の文章を読み、内容を三〇〇字程度で要約した上で、問題文中の「信仰のない宗教」について具体例を交えながら、自らの考えを七〇〇字程度で述べなさい（全体で一〇〇〇字程度）。

信仰というと、これは何かを信じることです。いちばん典型的には、キリスト教の信仰告白にあるように、全能の神とか世界を創った神を信じるか信じないか、あるいは処女マリアからイエスが生まれたことを信じるか信じないか、また三位一体を信じるか、キリストが死後復活したことを信じるか、そういうふうに一つ一つの条項として出てくると、信仰というのはちょうど試験の○×式と同じで、信じるか信じないか――もちろんどちらかわからないというのがもう一つありますが――、基本的にはイエスかノーかでしか出てこないのです。

これに対して、信仰のない宗教というのは、霊魂の不滅を信じるかというふうに聞いてもよくわからない。たとえば、ドーアという社会学者が東京の下町の調査をしました。そのとき彼が非常にびっくりしたのは、霊魂を信じるかと聞くと、大部分の者がニヒリスティックに、死んだら何も残らないとか、灰になるだけだといったということです。ところが一方では、みな仏壇を拝んでいるのです。そうすると信仰の考え方からすると、まず何かが存在する、何かが存在するとすれば霊魂が存在する、霊魂の不滅を信じてそして拝む、という順番になるわけです。ところが何かを信じることをうるさくいわない場合には、あるいはそのへんがぼやけている場合には、信仰のない宗教というのがありうるのです。

一つ例をあげると、お正月になるとむし返される議論に、初詣というのがあります。これがこんなに盛んになったのは、交通機関が発達したことや有力な神社・お寺の宣伝力が増えたという、非常に近代的な影響のおかげです。正月三が日の全国の神社は、一人でいくつも行く場合もあるし、まったく行かない人もありますが、二人に一人くらいは必ずお参りしているという統計になるはずです。

ところがその場合、では信仰を持っているか、あるいは明治神宮に行く人が明治天皇の霊魂の存続を信じているか、そもそもあそこに誰が祀られているか知っているかというと、そのへんはややたよりないものがあります。しかしながら、初詣をしなければなんとなく正月が来た気がしない。ある人に言わせると、せっかくの晴着を見せる場所がないとか、あるいは正月三が日はデパートもしまっているし、行く所がないから神社に行くのだという説もあります。しかしあれだけ多くの人間が、しかもこのごろは、けっして歳をとったいわゆる善男善女だけではなく、もっと多様な年齢層の人々が行くのは、それは心の改まりというか、年が改まるとともに心が改まるというような、そういうものを求めて行くわけです。一人一人に「神社を信仰していますか」「神様を信仰していますか」、あるいは「神様というものはそもそもあると思いますか」と聞いてみれば、これはまったくばらばらな答えが出るに違いない。

そこで、こういう宗教を信仰のない宗教、あるいは信仰箇条を持たない宗教とすると、日本の場合は、近代の「宗教のない信仰」を求める動きとともに、もう一つ「信仰のない宗教」というのがあるのです。そしてこの傾向は、何か恥ずかしいことのように思われる面があるわけです。

つまり、日本人というのは信仰心がない、あるいは確固とした宗教的伝統がないから、こういう「信仰のない宗教」という現象を呈するのだとして、これを恥ずかしいこととみる向きがあります。たとえば、時代によって教会のムードがはやる時があります。何週間か前の新聞によると、外国の教会で結婚式をあげるのが流行し、スイスのカトリック教会で集団結婚式をあげたら信者がプラカードを持って押しかけてきた。新聞や週刊誌は、やや恥ずかしげな口調で、これはムードだ、キリスト教を信じないのにキリスト教会で結婚式をあげる、そういうムードをやや批判的に、自嘲的に伝えています。

信仰のない宗教を、今日特に擁護するいき方は成功しないかもしれませんが、しかしそれは、一つのタイプとしてあるのだということです。信仰のない宗教、特定の信仰箇条のない宗教、内心の問題に還元できないような宗教があるのだということ、それはそれとして別に責められるべきものでもなく、とりあえず一つの形態としてあるのだということをいいたいのです。

折口信夫という有名な民俗学者がいます。亡くなってちょうど二十年になります。非常に直観的な、詩人的な人でしたが、また国文学者、あるいは宗教学者といってもいいような人でした。その折口が、「供養塔」という一連の有名な歌を作っています。その中で一つあげると、

人も　馬も　道ゆきつかれ死ににけり
旅寝かさなるほどの　かそけさ

もう一つ、

道に死ぬる馬は　仏となりにけり
行きとどまらむ旅ならなくに

これは詞書によると、馬頭観音の石の塔婆が立っているのが哀れである、またほとんど峠ごとに、旅に死んだ人の墓がある、中には病苦の姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人のものなどもある、とあって、冒頭の二首があります。こういう歌の解釈を、宗教学の資料として使うことは、まことに野暮な話ですが、しかしながらこれを信仰という面からみたらどうであろうか。

ここでは、人が亡くなり馬が亡くなった場合に供養塔を建てるのは、一つの習慣として考えられます。これは、折口信夫が旅行をした大正十二年（一九二三）の歌です。「道に死ぬる馬は仏となりにけり」、馬が仏になる、動物が人間と同じように亡くなって、そして成仏するという考え方は仏教思想の中にもあります。が、それは、信仰というふうなものからでたのではなく、もっと直截（ちょくせつ）に、ちょうど年の初めに心の改ま

りを感じたいと思えば神社にお参りするように、それが何を願うというのではなく、ごく一般的な家内安全というようなものを願う、信仰箇条はないけれども、しかし単なる日常の挨拶とは違う、一つの気分というものを作っています。死んだ馬、死んだ人間をかわいそうだと思い、供養することは、宗教の教理を見てもなかなか出てこないのですが、しかし人間の気持ちとしては、非常にわかりやすいものです。

（柳川啓一『現代日本人の宗教』に基づく）

（注）○「宗教のない信仰」　教団や教義、儀式というものに縛られない、心の問題という意味での信仰のこと。